

17 世紀イングランド常備軍論争 7-2

藤原 浩一

A Short
HISTORY
OF
Standing Armies
IN
ENGLAND.

————— *Captiq; dolis, donisq; coacti,*
Quos neq; Tydides, nec Larissæus Achilles,
Non anni domuere decem, non mille Carinæ.
Virg. Æn. ii.

L O N D O N,
Printed in the Year MDCXCVIII.

イングランドにおける常備軍の簡略史（つづき）

(21)

このことによりジャコバイトはそのむかし常備軍について再び同じゲームを演じさせるようにだれか邪悪な顧問官がもくろんだのだといひはっています。そして不当にもアイルランドの無視を同じ理由によるものだとしているのです。なぜならその怠慢によってそれを〔鎮圧、征服〕するために大軍を召集しなければならず、それを三月八日に国王は議会に通知され、アイルランドの嘆かわしい状態について演説され、占領するためには二万以下の騎兵と歩兵では望ましくないと断言された。これは議会にとって耐えなければならぬことであつた。じぶんたちは海上でフランスとの共同戦線の分担を維持できるだろうと思つていたが、救済策はなかつた。大軍を召集しなければアイルランドは失われてしまう。そしてうわべを飾るためにすべての廷臣は自分たちの演説の中に戦争が終結したときにはただちに軍隊を解散させることに賛成だという言葉を組み込んだのです。そして軍隊について戦時中に何度も論じられましたが、それと同じようにこの宣言は何度も繰り返されました。そして先の国会開会中にきちんと述べられたと思います。最終的にはこの案件は了承され、国王は騎兵、歩兵、竜騎兵の召集の委任状を発行されました。この地で悲惨な状況にあつてその職を得ようと必死に嘆願したアイルランドの地主たちはこの軍隊にはほとんど採用されませんでした。かの地に土地を所有していた人はおそらく、その王国を占領することにより強硬〔獐猛〕になるであらうといつて何人かの連隊長が同じ様に反対したのです。この軍隊が派遣される準備が整つたのは召集されてずいぶんたつてからでした。そしてそのときになつてもショーンバーグ⁶⁵が多くの事柄に支障があることに気づいたと広く語られていました。そして八月の中旬に彼らがやつと派遣されることになつたときでも敵と交戦できる状態ではありませんでした。〔最近〕ロンドンデリー⁶⁶の目前で進路を阻まれていましたが、すでに冬籠もりに入るべき時期であつた九月二十四日になつても彼らのもとには補給がとどかなかつたのです。このような次第でアイルランド軍は力と勇気を身につけ、我が軍の四分の三がダンドーク⁶⁷の宿営地で非業の死をとげたのです。

しかし、我が軍は何もなしとげられなかつたのですが、一方まともな武器も衣服もなかつた我が国の市民軍は奇跡を成し遂げたのです。印象的なロンドンデリー包圍戦を見て下さい。一万人の正規軍で塹壕に立てこもつていたマッカーティー將軍⁶⁸は千五百人の

(22)

イニススキリング軍⁶⁹に攻撃され、敗北し、彼自身も捕虜となり、部下のうち三千人が戦死しました。そして市民軍は他にも数多くの勇敢な作戦を実行しました。それにたいして彼らはカーク将軍⁷⁰によって軽蔑され不名誉にも解散させられました。そして彼らのほとんどの士官は餓え死にしてしまったのです。このようにアイルランドでの戦争は、たまたまそうなったのか、怠慢によるものなのか、もしくはわが国のかかえる問題から必然的にはぐくまれたのか（というのは私はそれが意図的なものであったとは考えたくないのです）、ついには陛下の偉大な才能や彼の行為に伴ういつもの成功によらなければ克服できないような大事件となってしまったのです。

その冬の議会でアイルランド問題が調査されその失敗の原因の大部分はシェール司教代理⁷¹であることがわかり、誰が彼を任命するように推薦したのかを議会に報告して頂きたいと陛下に願ひ出たのです。国王はその人物は覚えておられませんでした。それで議会は彼を拘束する命令をだしてくださるよう請願し、それは実行されました。それでシェールは議長に手紙を送り、イングランドに出頭させてもらいたい、そこで自分の嫌疑を晴らし、自分の行為を正当化したいと述べたのです。それで議会はできるだけ早く彼を召喚していただきたいと国王陛下に再び請願しました。そうすると国王はすでにそのような命令を出したと回答されました。それで議会は私的な委員会へその件を任せたのですが、報告書が提出される前に、もしくはシェールがイングランドへ召喚される前に、議会は停会となり、その後散会しました。そのすぐ後に彼は病いに倒れ、死亡したのです。この年、アイルランドを放置しておいたことにより、より多くの軍隊を召集する必要に迫られることになり、わが軍の編成を増強しなければならなかったのです。それは後にフランスに侵攻すると見せかけて、八万七千六百九十八人にまで増強されました。ついにはわが国の大軍と艦隊により、そしてその恒常的な維持費によりわが国は経済、技術、対フランス政策にとってきわめて厳しい状況となりました。そしてわれわれが強硬に反対したにもかかわらず軍隊を安全で立派なものだと主張して同居させたのです。

この戦争中のわが艦隊の行動によって得た戦果がほとんどなく、フランスを壊滅させる機会をどれほど失ってしまったかという説明はこの論説の目的ではありませんので割愛さ

(23)

せていただきます。これだけでもお気づきのことでしょうが、おそらく大部分は下級士官の怠慢、無知、不信に起因するのでしょう。それでも戦争中の全期間中にこれほどまでに

広範囲に起こることはありえません。そして商人の熱烈な訴えや何度も繰り返えされた議会での苦情にもかかわらず、原因が深く掘り下げられることもなく罰も与えられないままということはありえません。その原因がなんであるかあえて問いたですつもりはありませんが、私はそこからきわめて誤った議論が導き出されていることは確信しています。すなわち、わが国の安全のためには艦隊は役に立たないという主張です。講和条約が締結されるとすぐに陛下は外人部隊の大部分を解散されました。そしてガゼット紙に十個連隊をすみやかに解散するという公示が掲載されました。そしてそれが終了するとすぐに他の連隊もその例にならうとわれわれは告げられました。しかしこれらの決定は変更されたように思われます。そしていま世間で広まっている言葉はわが国は常備軍を維持するべきだという主張です。彼らの主張は真逆となりました。すなわち戦時中は平和を望んで軍隊を維持するべきだとわれわれは説得されました。現在は戦争を避けるために軍隊を維持するべきだと主張されています。フランスの状況は、彼らが何年間も非難してきましたが、現在は非難がいっそう大げさになっています。フランス王が町を一つでも引き渡すかどうかは疑わしく、どのような目的かわかりませんが彼は強大な艦隊を整備しつつありますし、わが国で市民軍を機能させることは不可能であるとわれわれは言い聞かされています。また好戦的な国王ジェニイ⁷²は一万八千人のアイルランド人の軍隊をフランスに駐屯させており、彼らは召集されればただちに参集するでしょうし、スペイン王は死にかけています。下院議員らはロンドンに集まったときに話しを聞かされました。ホイッグ党員は全員解雇されるであろうとささやかれています。国王を殺害する新しい陰謀が露見しました。そして反逆者ではなく不倫をしている人たちを見つけ出すために真夜中にシティー全体で捜索が実施されました。猟官者たちは話し合い、自分たち全員が同じ意見であることを見だしておおいに喜び、共感しあったのです。そしてどのような手段であれ、もう少しばかり同じ意見の人々を集めさえすれば世の中は自分たちのものになると語り合いました。そのようにして彼らは成功を確信したのです。そしてそれは百人以上の人々の声によって実行

(24)

されなければならないと確信したのです。

議会では開会して一週間もたたないうちにこの問題が検討されました。委員会における問題は千六百八十年以後に召集されたすべての軍隊は解散すべきかどうかというものであり、この件は肯定され、宮廷は採決に持ち込むことは出来ませんでした。そして翌日、それが報告されたとき、彼らは投票を避けようとはせず、それは国王を昔のトーリー派の連隊に縛りつけるという口実で再び委員会に付託しようとしてしました。(ついでながらそのよ

うな連隊のどれ一つとして解散されてはいなかったのですが) そして千六百八十年の軍隊は多すぎるといふ人もいました。わたしは彼らの多くとしばしば論議しましたが、その当時この投票結果により国王陛下に残された軍隊よりも強大な軍隊を主張されたひとはいなかったといって差し支えないでしょう。彼らの主張の理由が何であれ、賛成票が百八十五で反対票が百四十八で三十七票の大差によって彼らとは反対の意見が通りました。議案を再び付託することに賛成した百四十八人の発言について、百十六人は官職についていたという彼らの発言についてはここでは取り上げません。それが事実かどうかを疑問におもうからです。また彼らの官職が彼らの考えを偏向させたとも思いません。

これは完全な勝利であり、それを挽回するには卓越した技量と演説が必要です。フランスに対する脅威がふたたび強調され、フランスは実行を拒否しましたがジェームズ二世をフランスから出国させるという秘密条項があるというものでした。ブフレール⁷³とポートランド伯爵⁷⁴がおたがいに嘘をついたと非難しあいました。後者の随行者の何人かが殺害されたとか、フランス大使が足止めされたとか、スペイン国王が死亡したとか、さらに多くの嘘がつけられたとのことです。R なんとかにクラブが設立され、大々的な申込があり、物品税関係の委員会が整理されることになったと宣言され(それによって九つの委員会の役職は廃止され、四十人以上の人がそれに指名されました) 多くの地方の大地主は帰郷しました。このように補充して、彼らは新しい論戦にたいする準備を整えました。そして国会の規則に従えば、前回の投票結果を直接無視することは出来なかったので護衛兵と守備兵の供給を考える方法と手段として委員会へ指示を提案するという間接的な方法でそれを試みようとしてしました。しかし反対側はこれを未然に防ぐために以下の言葉、すなわち、「十二月十一日の投票結果により」という言葉をつけ加えて修正案として提案しました。

(25)

この件はさんざん議論され、軍隊に反対の諸君は自分たちの考えを明らかにしました。そして国王に千六百八十年の連隊を義務づけることには賛成ではないが連隊数だけを問題にして、国王が自分の好きな連隊を選べばよいと主張しました。このような手段をもちいて彼らは実行しましたが、大いに反対がなかったわけではありません。(以前に述べた理由でのみ先の投票を再び委員会に付託することあらゆる場所で賛成だと宣言した紳士方はだれもいなかったと思います。) その他に、かなりな人々から自分たちの考えを明らかにするように強制されました。というのは彼らは国王にオランダ連隊⁷⁵を認めていましたし、タンジール連隊⁷⁶も認めていたからです。それは私の知るかぎり、以前の投票では

十分には理解されていませんでした。その意味は国王はチャールズ二世がイングランドで千六百八十年に維持していたすべての軍隊を維持すべきであるというように思われますが、これらの軍隊は当時イングランドにはいませんでした。オランダ連隊はその軍人もオランダによって給与が支払われていました。そして他の連隊は五百リーグ離れたタンジールにいました。しかしこれらすべての利点があっても軍隊の紳士方は満足されないでしょう。というのは委員会内部で彼らは護衛兵と守備隊の費用として合計年間五十万ポンドを提案して、再び投票を避けようとつとめたのです。特定の数字を指定しなかったのですが、それは二万人以上の軍隊を維持することになるでしょうが、これは承認されませんでした。それゆえに彼らはある種の軍隊の編成内容で妥協することになりました。一万人だけを維持するとして、その大部分は騎兵と竜騎兵にすればその維持費用総額は三十五万ポンドとなります。しかしこの他にも彼らはあとで（陸上戦力ではなく海上戦力だと主張して）三千人の海兵隊を提案しました。これは承認されました。

ここで私はひとつ述べさせてもらわなければなりません。すなわち、冬の初めには議会によって軍隊を認めてもらわなければ、それ以外の何ものも廷臣を満足させることはなかったでしょう。そして他の条件では彼らは受け入れられないでしょうし、あらゆる中隊で語られていたことですが、国王にほかの方法で軍隊を維持するように進言した大臣はみな、また委任状を持ち続けた士官はみな大逆罪として告発されるべきだといわれています。その件については、私はこれらの紳士方と意見を異にしていませんし、彼らが意見を変更したと非難するつもりもありません。というのは彼らはおそらく護衛兵と守備隊に三十五万ポンドを与えるための決議は、駐屯地の中と同様に外でも、また国王の身近であれ離れた場所であれ、イングランドのあらゆる地域において兵士を宿泊させることは十分法律に対抗できる理由があると考えているでしょう。

(26)

このようなことは千年以上ものあいだ一度でもわが宮廷がこれほどずうずうしく求めたことはありません。年金議会⁷⁷には驚愕すべきことがらであり、とうてい思いつくことさえできません。（ほとんどの議員が国王自身によって選ばれていた）ジェームズ二世の議会でさえも討論することを苦痛をおぼえずには耳にすることがなかったような事柄を、われわれはたとえ解放された状態のもととはいえ自分たち自身の時代に制定してしまうという栄誉を得ることになりそうです。

さて、われわれは彼らが下院の決議にどの程度従ったか吟味してみようと思います。これまで述べたような方法を使って最初の投票で承認を勝ち取ったので、彼らがなんの技巧

や言いのがれもせずに残りを立派に実行にうつすなどとは容易には想像できません。そうではなくて彼らはすべての騎兵や歩兵から一定数の軍人を集めて、軍隊のもっとも本質的で責任あるすべての士官をとどめておいたのです。兵卒はいつでも好きなときに数日間で再び召集することが出来ます。これがあらゆる士官が自分たちの利益のために実施したであろう解散です。そしてチャールズ二世の時代につねに実施してきたことですし、戦争中でもないこの治世においても同様なのです。したがってそのような改革の効果は士官に偽りの名簿をつくらせないようにして、少数の一般兵士の給与を節約することだけです。

しかしこんなことをしても国民を満足させることは出来ません。したがって彼らは騎兵、歩兵、竜騎兵の一部を解散しました。そして大多数をアイルランドへ派遣するというあの深遠な手段を考えついたのです。あたかもわれわれの苦しみの種が彼らによって奴隷化されることの恐怖ではなく、彼らの資金をわれわれの国内で使ってしまうということだともいうように。残念ながらこの国は常備軍を六十マイルほど遠ざければわれわれの恐怖心を取り除くことができると考えるほどこれらの紳士方の意見をひどく軽蔑するようになっていきます。そこからは数日間で彼らを呼び戻すことが出来ますし、そればかりでなく、アイルランドで維持されている軍隊は国内の軍隊よりもさらに危険なのです。というのは当地では彼らの関係者、知人との日常的なやりとりによって彼らのかなり多数が自分たちの国へ心向けるかも知れません。それに対してアイルランドでは、彼らはあたかも駐屯軍のようにして維持されますが、彼の地では自分の同国人とは通信が遮断され、他人の利益のために養成されるでしょう。これは真実であり、配下の兵士が住民と友情をあた

(27)

ためたり、また次第に住民の利益にはまっていくなかのように専制君主が兵士の駐屯地をしばしば変えるのは常套手段です。

おそらくアイルランドの国民が彼らの給与を支払うのだといえるかも知れません。そうならば事態はさらに悪化するでしょう。というのは彼らは自分たちの国に敬意を抱く可能性が少なくなるからです。その他には、もしイングランドの大法官の貴族院での演説を考慮してみれば、国王陛下が解散させられた士官への援助を続け、現在の軍編成（ついですがそれはチャールズ二世の時代よりも三倍近くも大きいのですが）を維持するように期待しておられることを知らされます。そしてこれは他のいかなる儀式も時代の必要条件もなく（国王陛下はイングランドおよびスコットランドの議会にたいしてその考えを表明されたのですが）、われわれは彼らがこの件について異議をとる状況にはないと確信できるでしょう。とくに自分たちの職業にかんして辛苦が課せられることになると考えてい

るようなときには。それゆえにわれわれは彼らが自分たちに敵対する法案の通過を妨げることができなければ、自分たちが実行することを黙認してもらうことを期待して、力の限り宮廷を満足させることは確かでしょう。さらにこのような方法で彼らは自分たちの資金を自分たちの国にとどめておくのだと付け加えていうことが出来るかも知れません。その資金の大部分は以前はイングランドにもたらされていたのです。そしてもしわれわれが彼の地の軍隊を解散してふせがなければ、昨年われわれが彼らに対して計画したことの仕返しを受ける可能性があるでしょう。というのは以前チャールズ一世の治世十五年目にアイルランドのストラッフォードの軍隊が、そして最近ではわがイングランド議会が千六百七十八年にそうしたように。

ここで注意を喚起しておかなければなりません。アイルランドとイングランドでは現代風の意見というものがどれだけ異なっているか。というのは彼の地の意見では、「軍隊を維持することについてわれわれは宮廷に従わなければならない、そうでなければウール製造業は消滅してしまう。」そして当地でもはやされている意見では、「ウール製造業を破壊するためにアイルランドに軍隊を維持しなければならない、そして彼らに敵対する法律を適用しなければならない。そのためにアイルランド国民は彼らに資金を支払わなければならない」と告げています。

軍隊をアイルランドに派遣するこの計画はきわめて見えすいたものだったので、彼らはそれにはあえて頼らないでしょう。そしてそれゆえに彼らは資金が手に入ればただちにより多くの連隊を解散するつもりだとわれわれに告げました。それが実行されるであろうと

(28)

国民は大いに期待しました。そしてそれは何回か議会でも取り上げられました。そして廷臣はいつも軍隊を解散するための資金不足以外にはなんの障害もないと彼らに保証してきました。さらに十八の連隊が解散されるとあらゆる公式の場で自信を持って発言されました。そしてそれらの連隊の名前も挙げられました。そして私は国王が枢密院でそれに署名されたと執行官や士官自身が確信をもって断言したのを聞いたことがあります。このようにしてこの会期はだらだらと過ぎてゆき、期待で疲れ果てた下院が陛下に、解散した軍隊、解散予定の軍隊、そして半額支給になる士官の氏名についてそのリストを議会に提示してくださるようにと請願しました。すると陛下は下院の要求に都合がつけばできる限りすみやかに従うと答えられました。しかし議会はそれ以後、一ヶ月以上は続かなかったもので、陛下はそれ以上の回答は寄せられませんでした。

ついには議会が立ち上がり、軍隊を解散する代わりに彼らは非常に多くの外国の連隊を

呼び入れて、さらにイングランド軍をもう三連隊くわえて一緒にアイルランドへ派遣したのです。しかしこれらをすべて実行してもイングランドにおける軍隊は一万人以下には減りませんでした。それで彼らはさらに再編成を実行しました。そして解散した連隊の士官をアイルランドで常備軍に組み込んだのです。その方法によりその連隊は士官の軍隊となりました。一方、もしこれらの紳士が突然の侵略からわれわれを守るための軍隊にするつもりとか、またはスペイン国王の死に対する準備とするつもりなら、私の意見では彼らは私兵を維持しておくべきであり、私兵を指揮するのに必要な士官以外の全員を解散すべきです。というのは士官はいつでもよろこんで良い職につきますが、一方兵卒は自国民を襲撃するためだけなら容易に集めることができますが、新しい戦争のためであれば集めることはとても困難だからです。

この軍隊のひとつのよい効果はすでにあらわれています。というのはすべての人が先の選挙で、「もしこれこれの人を選べばわれわれは無銭宿泊から避けられる」といういかに有力な議論を耳にしたことでしょうか。そして私はこの議論が毎日強まっていくことは望みません。そればかりでなく、別の治世に国王が自治体に軍隊の士官を選ぶように、そし

(29)

て議会にその軍隊を維持することを期待すると告げられることがあるかも知れません。

しかしこの件を全体的に見るために、私はここで千六百八十八年⁷⁸のチャールズ二世の軍編成について述べておきたいと思います。それは現在の国王陛下の軍編成と同様に十二月十一日の投票の基礎となりました。そしてこの軍編成において私の他の計算と同様に、詳細な点にまで細心の注意は払いましたが間違っている点があるかも知れません。また、それは私の目的には別に不可欠なものでもないもので、実情からの差は考慮するほどのものではありません。

私は改革の前の連隊のウィリアム三世の軍編成についても述べておきたいと思います。なぜなら、士官全員がまだ残っており、兵卒の大部分が残っています。私はそれを実質的に全連隊規模と見なしています。もし彼らが内地勤務であれば残りは数日で再召集できます。しかし私が先に述べたように、彼らがスペインやフランドス派遣軍として計画されるのであればきわめて困難です。しかしこの点で、もし私の意見と異なる人がおられれば、その人にはご自身の推論を示して頂ければよいでしょう。

(30)

1680 年当時におけるチャールズ二世のイングランド軍編成

イングランドの騎兵および竜騎兵

	騎兵および歩兵	士官	下士官	兵	合計
近衛兵	3	48	15	600	663
王立騎兵連隊	8	34	40	400	474
1680 年 7 月召集竜騎兵中隊	1	4	8	40	52
騎兵と竜騎兵の総合計	12	86	63	1040	1189

イングランドにおける歩兵

儀仗兵	1	6	0	40	46
親衛隊	1	7	0	100	107
第一連隊 歩兵衛兵	24	75	192	1440	1707
コールドストリーム連隊	12	39	96	720	855
ヨーク公連隊	12	39	96	630	765
オランダ連隊	12	39	96	600	735
独立中隊	26	78	208	1260	1546
イングランドにおける歩兵総合計	88	283	688	4790	5761

(31)

チャールズ二世の 1680 年におけるアイルランド軍編成

騎兵中隊	24	96	196	1080	1372
------	----	----	-----	------	------

アイルランドの歩兵

親衛隊	1	3	0	60	63
-----	---	---	---	----	----

近衛連隊	12	40	99	1120	1259
シングル中隊	74	212	444	4440	5166

.....

アイルランドにおける歩兵合計	5620	6428			
----------------	------	------	--	--	--

ここには約 3000 人のタンジール守備隊は載せていません。なぜならその場所は失われ、その結果守備隊を必要としないからです。

次に現国王の軍編成との比較

騎兵と竜騎兵 イングランドの編成。

三護衛騎兵中隊	3	48	15	600	663
オランダ護衛騎兵中隊	1	15	5	200	220
騎兵中隊	1	11	20	180	211
オックスフォード卿連隊	9	40	45	531	616
ポートランド卿騎兵 オランダ連隊	9	42	54	603	699
ラムレー連隊	9	40	45	531	616

(32)

ウッド連隊	6	28	36	354	412
アラン連隊	6	28	36	354	412
ウインダム連隊	6	28	36	354	412
ショーンバーグ連隊	6	28	36	354	412
マクルスフィールド連隊	6	28	36	354	412
ラビー竜騎兵	8	37	72	480	589
フラッド竜騎兵	8	37	72	480	589
エセックス竜騎兵	8	37	72	480	589

.....

イングランドにおける総騎兵数および竜騎兵数

	86	447	580	4855	6876
--	----	-----	-----	------	------

歩兵 イングランド軍編成。

儀仗兵	1	6	0	40	46
親衛隊	1	7	0	100	107

ラムニー卿の四大隊

28 99 222 2240 2563

カット卿の二個大隊

14 51 112 1120 1283

ブルーガード オランダ連隊、四大隊

6 96 208 2366 2670

オークニー伯 スコットランド連隊

26 88 208 1560 1656

セルウイン連隊

13 44 104 780 928

チャーチル連隊

13 44 104 780 928

トレローニー連隊

13 44 104 780 928

アール連隊

13 44 104 780 928

セイモア連隊

13 44 104 780 928

コルト連隊

13 44 104 780 928

モードント連隊

13 44 104 780 928

デイヴィッド・コリア卿連隊

13 44 104 780 928

ジャージ駐屯チャールズヒーロー卿

フュージリア連隊

13 46 104 780 930

(33)

コリンウッド連隊

13 44 104 780 928

アップノール城 の歩兵

1 2 6 50 58

イングランドにおける総歩兵

227 793 1796 15276 17865

騎兵および竜騎兵 アイルランド軍編成。

ルーソン連隊

6 42 30 354 412

ラングストン連隊

6 42 30 354 412

ゴールウェイ卿 フランス連隊

9 113 45 531 689

ロス竜騎兵

8 37 72 480 589

エックリン竜騎兵

8 37 72 480 589

カニングム竜騎兵

8 37 72 480 589

マーモン フランス連隊

8 74 144 480 698

.....

アイルランドの総騎兵数と竜騎兵数

	53	338	465	3159	3962
歩兵 アイルランド編成、解散した士官を含む					
フェアファックス連隊	13	66	104	780	950
コロンバイン連隊	13	66	104	780	950
ウェップ連隊	13	66	104	780	950
グランヴィル連隊	13	66	104	780	950
ブルーワー連隊	13	66	104	780	950
ジェイコブ連隊	13	66	104	780	950
ハウ連隊	13	66	104	780	950
スチュワード連隊	13	66	104	780	950
ハンモア連隊	13	66	104	780	950
ティットコウム連隊	13	66	104	780	950

(34)

スタンレイ連隊	13	66	104	780	950
ブリッジス連隊	13	66	104	780	950
ハミルトン連隊	13	66	104	780	950
インゴルスビー連隊	13	66	104	780	950
ピサール連隊	13	66	104	780	950
ベラシス連隊	13	66	104	780	950
グスタフ・ハミルトン連隊	13	66	104	780	950
ティファニー連隊	13	66	104	780	950
マートーンフランス連隊	13	83	104	780	967
ラメリオネール フランス連隊	13	83	104	780	967
ベル・カースル フランス連隊	13	83	104	780	967
西インドのホルト連隊	13	44	104	780	928

(アイルランド軍ではない)

.....

アイルランドの歩兵総数	286	1481	2288	17160	20929
-------------	-----	------	------	-------	-------

次に両軍編成を比較する。

イングランド軍編成。

1680 年のチャールズ二世のイングランドの騎兵

	12	86	63	1040	1189
イングランド歩兵	88	283	688	4790	5791

イングランド騎兵と歩兵	100	369	751	3830	6950
-------------	-----	-----	-----	------	------

アイルランド軍編成。

アイルランド騎兵	24	96	196	1080	1372
アイルランド歩兵	87	265	243	5620	6428

アイルランド騎兵と歩兵	111	361	739	6700	7800
-------------	-----	-----	-----	------	------

(35)

イングランドとアイルランドの全軍

イングランドとアイルランドの騎兵

	36	183	259	2120	2561
--	----	-----	-----	------	------

イングランドとアイルランドの歩兵

	175	548	1231	10410	12189
--	-----	-----	------	-------	-------

イングランドとアイルランドの全軍

	211	730	1490	12539	14750
--	-----	-----	------	-------	-------

ウィリアム三世の軍編成。

イングランドの騎兵	86	441	580	5855	6876
-----------	----	-----	-----	------	------

イングランドの歩兵	227	793	1796	15276	17865
-----------	-----	-----	------	-------	-------

全イングランド軍	313	1234	2376	21131	24741
----------	-----	------	------	-------	-------

アイルランド軍編成。

アイルランド騎兵	53	338	465	3159	3962
アイルランド騎兵	286	1481	2288	17160	20929
.....					
アイルランドの全軍	339	1819	2753	20319	24891

イングランドとアイルランドの全軍

イングランドとアイルランドの騎兵と竜騎兵	139	779	1045	9014	10838
イングランドとアイルランドの歩兵	513	2274	4084	32436	38794
.....					
イングランドとアイルランドの全軍	652	3053	5129	41450	49632

したがって現国王陛下のイングランド軍とアイルランド軍だけでもチャールズ二世の千六百八十年当時の三倍以上の軍隊があり、士官はほとんど五倍近く、下士官は四倍近い数です。そして司令官が兵を召集する命令を受けると三倍以上もの一般兵士数となり、加えて解職された士官で他の連隊に組み込まれていないものもあります。そしてあたかも彼らの連隊が存在しているかのように現在の軍編成に加えて宮廷にはそれらの兵士がいること

(36)

になります。

スコットランドの軍隊は、千六百八十年には二千八百六人でした。

近衛兵	1	15	5	120	140
王室竜騎兵連隊	8	37	72	320	429
ジェドバラ竜騎兵	6	27	54	240	321
近衛歩兵連隊	16	51	128	912	1091

ルー フェージリア連隊	16	51	128	640	819
コリアもしくはハミルトン竜騎兵	16	51	128	640	819
ナトランドの竜騎兵	16	51	128	640	819
守備隊	4	12	24	295	331

スコットランドの総軍隊数	83	295	667	3807	4769
--------------	----	-----	-----	------	------

これらの軍隊は自分たちによく知られた事情で現在は削減されスコットランド議会によって承認されたもの。疑いなくきわめて適切なもので、広く語られていますがその王国の十人の枢密院議員は軍隊に反対であったらしく枢密院から追放されました。それはもし真実であれば国内の紳士方に十分な警告となるでしょう。

しかし、スコットランド軍の利用方法があります。もしイングランドの議会が軍隊を必要と考えたときにはより少数の軍隊で十分になります。

(37)

国王陛下のオランダにおける軍隊。

ローダー連隊	13	44	104	780	928
ウィリアム・コリンズ連隊	13	44	104	780	928
マレー連隊	13	44	104	780	928
ファーガソン連隊	13	44	104	780	928
ストラナヴェール連隊	13	44	104	780	928
_____	13	44	104	780	928

オランダにおける全兵力	78	264	624	4680	5568
-------------	----	-----	-----	------	------

したがって国王陛下の全兵力は以下の構成となります。

813	3612	6420	49937	59969
-----	------	------	-------	-------

これらのうち七千八百七十七人が外国人です。それは敵以外でイングランドに足を踏み入れた最初の外国軍です。これを書いたあとにブランデルの連隊は存在しており、エッピンガーの竜騎兵はイギリスが給料を支払っていると聞かされました。それがもし真実な

ら、全軍隊は六万数千人になります。しかしこのリストは他の部分と同様に、私が間違えているかも知れません。それについてはお許しいただきたく思います。たまたま士官との談話から書き出さなければならなかったのです。R 卿のオフィスに問い合わせましたが不調だったのです。このような興味を別の機会に示したときには拒絶されなかったでしょうが。もしオレンジ公がその宣言で、われわれが再び奴隷化されるような危険におちいることはないという前提のもとにわれわれが決定すべきであるとか、目的が達成されれば直ちに自分の軍隊を送り返すつもりだというかわりに、八年戦争終結後、それは二千万ポンドの借金を残すことになりますが、われわれは常備軍を編成し、その大部分を外国人とする と約束しておられれば、そのような革命が自分たちの生命と財産をかける価値があると考えた人はほとんどいなかったでしょう。しかし彼の強力な精神はこのような下劣な考えを越えていました。彼の宣言は自分自身のものであり、これらの取るに足らない計画はわれ

(38)

われの請負人たちのものであり、彼は自分の神聖な名前のもとに彼ら自身の迫害の苦しみの避難場所としてくださるでしょう。私はぜひ知りたいのですが、先のジェイムズ二世が軍隊だけでわれわれを奴隷化できたかどうか、また軍隊を解散するだけでわれわれが奴隷化から守られる保証があるかどうかを。その意味において私は陛下の宣言を理解しましたし、それゆえに私がいつもその心づもりでいたように彼のために早くから武器をとって戦いました。彼の支援をわれわれが必要としたのはこのためだけです。そうでなければわれわれは絞首刑執行人の助力以外は何も欲しませんでした。

あえて言いますが、もしこの軍隊がわれわれを奴隷とすることがなければわれわれは軍隊の四分の一の数で、奴隷状態から免れた地上で唯一の国民となります。それはアレキサンダーがアジアを征服したときの軍隊や、シーザーがゴール地方を征服したときよりも強大な軍隊で、実際にローマ帝国全軍よりも強大なのです。われわれの先祖がフランスを侵略したどの軍隊とくらべても、アゲシラウス⁷⁹がペルシャを、ヒュニデス⁸⁰とスカンダーベグ⁸¹がトルコ帝国を侵略したときよりも二倍の軍隊なのです。四十年戦争期間中⁸²においてオランダとスペインとの間のすべての戦闘と同様な人数であり、イングランドにおける国王と議会との戦いも同様です。オレンジ公がイングランドに上陸したときの四倍もの軍隊であり、手みじかに言えば、世界で戦われた十の戦いのうちの九の戦闘の両軍を合わせた軍隊と同じ勢力です。もしこの軍隊がわれわれを奴隷化しないとすれば、それは奴隷化しようと試みない有徳の君主のおかげだけです。そして当代のもっとも正義感あふれる君主であったとしても、ひとりの人物の意志より他にはわれわれの自由について何の

安全保障もないということはきわめて惨めなことです。というのは、よき君主がいても、暴君となろうとしてもなれないような制度がないところでは自由な政府とはいえません。それはたとえ最も専制的な政府でさえも時にはその悲惨さを緩和した時もあったからです。キケロの言葉によると、主人が圧政をしなくても、彼にそうする権力があることは悲しむべきことです。そしてそれゆえに、そのような権力は誰にも与えてはいけません。その権力がたとえ暴君を生みださなくても、一般的に暴君を生み出すものなのです。そしてもし本人がそうならなくても確実に後継者がそうになってしまいます。

チャールズ二世の御代にもしもホイッグ党員と呼ばれていた人々のだれかが議会や個人的な集まりの双方において自由で高貴な精神を持ち、少数の衛兵を暴政の象徴であり、我が政体の破壊であり、常備軍の基礎だとして反対していたら、つまり、救世主がやってき

(39)

て、圧迫のもとで苦しんでいた人々を救い出すと彼らに告げていたら、また、フランスをうんざりする消耗戦によって当時の半分の戦力にまで弱小化させると告げていたら、その当時でも彼らはただ受動的というのではなく、自分たちの最大限の利益のために利用したでしょう。そしてそれほどまで巨大な軍隊を維持するための説得力のある表現を見つけ出すために自分たちの理性をゆがめていたことでしょう。そして自分たちが一生涯不平を述べ続けていた悪習をそのような手続きを正当化する先例とするでしょう。これを述べた人は誰であれ、自分の名声にはきわめて無関心で、多くの悪意を持っている人物と見なされたはずでしょう。しかし真実は、われわれは奇跡の時代に生きてきたのであり、不機嫌な愛国者が奴隸的なへつらい人となり、昔の共和主義者が専制を支持する立場を宣言し、提督が艦隊を非難するような光景を目にすることはないといえるほど途方もないことはあり得ません。

しかし軍隊を維持するためにどのような性質の主張を今年われわれの雇い主が考え出すでしょうか。十分な理由の存在は狭い範囲にかぎられ、想像できることですが、役に立たない理由は無限にあります。昨年彼らが主として主張した議論は、わが国が軍隊を解散してしまえばフランス国王がどの町を引き渡してくれるか分からないというものでした。また、ジェイムズ二世はフランス国王の庇護のもと献身的な一万八千人の軍隊を維持していました。またフランスの大艦隊が未知の計画のために準備を整えていました。またスペイン国王が死にかけていましたし、市民軍はまだ態勢が整っていませんでした。そして世界情勢がどのように変化するかを見極めるために一年だけ軍隊を維持すると主張したのです。わがポートランド卿とブフレールの口論についてのいくつかの嘘や、六ヶ月以内にわ

が国が侵略されるといういくつかの予言などが、発言やパンフレット類の趣旨でした。今、現実には、フランス王はジロン⁸³、ロセス⁸⁴、ベルバー、バルセロナを引き渡し、カタロニア⁸⁵の大部分の州を引き渡しました。ルクセンブルクの町と州、シニー伯領⁸⁶、モンズ⁸⁷、シャルルロワ⁸⁸、クルトレー⁸⁹、それにスペインの地方であるアエスをスペイン王に返還しました。ディナン⁹⁰の町はリエージュ主教領⁹¹へ。ピネロロ⁹²、カサーレ⁹³、スーザ⁹⁴、モンメリアン⁹⁵、ニース⁹⁶、ビラ・フランカ⁹⁷などすべてをサボイに、そしてピエモンテ⁹⁸の一部をサボイ公へ引き渡しました。

(40)

トレーヴ⁹⁹の町やゲルマースハイム¹⁰⁰やパラティネイト¹⁰¹、シュポンハイム伯領¹⁰²、フェルデンツ伯領¹⁰³、デュボン公領¹⁰⁴、モンベリヤール伯領¹⁰⁵、そしてブルゴーニュ¹⁰⁶のいくつかの所領、キール砦、フリブール¹⁰⁷、セント・ピーターフォート、デストワール、フィリップスブルク¹⁰⁸、そしてアルザス¹⁰⁹のほとんど、エベレンブルク¹¹⁰、そしてロレン公領¹¹¹を神聖ローマ帝国へ返還しました。彼はヒュニゲン¹¹²、モンロワイアル、そしてケルンブルクを破壊したのです。

彼はオレンジ公国をイングランド王へ引き渡しました。

これらは広大な国々であり、その大きさはイングランド王国と同じぐらいの大きさがあり、フランス王が十万人以上の軍隊を維持することができました。その他に、彼は自分が引き渡したり、破壊した要塞に巨額の資金を注いでいました。これに加えて、彼の王国はこの戦争により悲惨なほどに困窮し、人口が減りました。その製造業はひどく損害を被りました。数多くの役所が建てられましたが、それはヒルのように人間の血を吸いとりました。巨額の負債が生じ、そしてもっとも有益なイングランドとの取引が失われました。これらを考慮すると、彼らが過度に無謀な危険をおかす可能性はとりわけここ数年はきわめて少ないでしょう。それでもわれわれはフランスという名前に脅されます。そしてその脅威は彼らの国力が決して効果を発揮したことの無いものに対して処理しなければなりません。それは彼らが同じ手段によって奴隷化されたことを考えれば少しばかりひどすぎます。というのはルイ十一世の時代には、フランスはイングランドを恐れて自分たちの自由を放棄しました。そして今、われわれはフランスを恐れて自分たちの自由を放棄しなければなりません。

第二に、われわれが大いに脅威に感じていたジェイムズ二世のイングランドの軍隊とアイルランドの軍隊の大部分は解散されました。そして彼は陛下の慈善によって生きていくと言われています。それは彼の善行にとって十分ないましめとなるでしょう。

第三に、別の恐怖となるフランス艦隊に対抗する艦隊がわが国にはありませんが、彼らは今年は二十隻を越えていませんし、また何も試みてはいません。

第四に、スペイン国王¹¹³は死亡していませんし、またここ数年間はほど危険な状態ではありません。そしてわれわれは陛下がその並外れた思慮により彼が死亡した場合に新しい戦争が起こることを予防する注意を払われるという希望がないわけでもありません。

第五に、市民軍については、私はすべての人が今では満足していると考えています。従ってわれわれは軍隊を解散するまではそれが実戦力となることを目にすることは決して

(41)

期待できません。私はその件の全体的な反感を宮廷に投げかけるためにここに出てきていると思われたくはありません。というのはイングランドには他にもいくつかの党派があり彼らは市民軍を過度に熱望しているわけではありません。第一に、ジェイムズ二世の無価値なものを復旧させようとする人々、そして軍隊を解散させ、その余地に軍隊は設置したくない人々。次に国王にとって直接的な敵ではない雑多な種類の集団があります。それでも彼らの空想的な長所は自分たちの犠牲で報われることはないので、彼らはひどくシャグリーンで彼にきわめて高貴な体制という評判はみとめようとしません。この他にも、わが国の市民軍以外には何の考えもないような人々がおり、古代と近代の歴史にはまったく無知なので、それが非実用的だと考えています。そして何人かのあわれな連中は費用のせいで反対しています。一方、もし彼らの母親が計算方法を教えていれば、彼らは五万二千人が一月で必要とする経費は、給与が同じだとすれば、一年に四千ポンドという同じ額を臣下に請求することになります。そしてそれが三分の一ほどより大きいとすれば、それは六千になるでしょう。そしてもしわれわれが先の法案でより少数の部隊で訓練するようにという計画よりも二週間長いことを認めれば、そのような市民軍の最大の経費は一年間九千人の軍隊を養うほどの金額にもならないでしょう。私が言及したどの党派も、なくすことは全員がうれしく思うでしょうが、公然と市民軍に反対することはないでしょう。そして私の考えでは、誰しも否定するほど強硬なものはいないでしょうが、もし宮廷が昨年、常備軍を維持するための法案を通過させようと考えて努力したように市民軍の訓練を推進することに活力を発揮してさえくれればありがたいと思います。もしわれわれが軍隊を解散すれば彼らは市民軍の訓練を確実に実施するでしょうし、彼らは市民軍が必要だと考えるでしょう。もし彼らがそう考えないのであれば、われわれが軍隊が必要であると考え理由はありません。その間にわれわれが侵略されるかも知れないと彼らが語るとき、彼らは本気ではありません。というのはわれわれ全員が知っているように、もしフ

ランス国王が何らかの意図を持っていれば、彼らは別の方法をさがすでしょう。その上、彼は輸送手段の準備はしていませんし、また侵略する準備もしていません。そしてもし彼がそういう意図を持っていたとしても、われわれには彼を妨げる艦隊があります。いや、そればかりではなく、ロンドンやほかのいくつかの州には市民軍がいて、適度に訓練されています。そして私が思うに、市民軍をもっとも軽蔑しているような人々でも市民軍に生来の勇気があることは認めるでしょうし、他の国民と同様によき手足となるでしょう。そして彼らがその他には何も認めないというなら、それなら十万から十二万の軍隊が存在し、

(42)

あらかじめリストアップされ、組織化され、馬に乗り武装しています。そしてもしひとたび事が起これば、陛下は自分の好む昔の軍隊の士官をその指揮官とすることが出来ます。そして議会は陛下が必要とされる権力はどのようなものであれ認めることになるでしょう。これに加えて、解散した軍人たちもおそらくこの軍隊の一部として参加するでしょう。少数の人間のまに合わせの侵略がおきたとしてもなにを恐れることがあるでしょうか。

私はここでは市民軍の性質という主題はすでに十分に扱われてきたのでここで述べることは避けてきましたが、つぎのことだけは述べておきたいと思います。平時における常備軍はたいていの場合重労働をともなって訓練される市民軍よりは駐屯地において不道德な生活を送ることによって女々しくなってしまう。したがって全体的に、平時の常備軍は市民軍より悪いものです。そして戦時には市民軍はすぐに訓練された軍隊となります。

六番目に、軍隊は一年間維持されてきましたが、その条件で主張されてきました。彼らの予言にもかかわらず、われわれは侵略も受けなかったし、なんの危機も経験しませんでした。

最後に、ポートランド伯爵とブフレール元帥は口論していたどころではなく、おそらくイングランド大使がフランスでこれほどまでに多くの名誉を得たことはないでしょう。

しかしさらに、あらゆる問題には危機があります。それはひとたび失われると決して取り戻すことはできません。いくつかの出来事が重なり合って今軍隊を解散することが可能になっています。このような機会は二度と起こらないかもしれません。われわれは新しい議会を持ち、廷臣の陰謀によって腐敗しているわけでもありません。そのほかに、兵士自身がこれまで戦争の疲労以外はほとんど何も知りません。そしてこれまで給料の支払いを受けてきたので、兵卒は解散を喜ぶでしょう。そして士官は給与を半額支給されることを考えればそれを大きな不安に感じることはないでしょう。暴動と贅沢な生活をするような

彼らを期待しなくて済みます。これに加えて、わが国には良き君主がおられます。彼の心は状況と同様に国民の妥当な要求に従う義務を負うことになります。しかし得意になるのは止めておきましょう。これはいつもそうだとは限りません。もし軍隊が数年間続けば、彼らは王権の一部と見なされるでしょう。そしてそれはチャールズ二世の時代の護衛兵のように彼らを解散させることは王権の大きな侵害と考えられるようになるでしょう。それは国王を退位させる計画だと解釈されるでしょうし、軍隊を維持する議論となるでしょう。

(43)

しかしまだ他にも理由があります。公共の必要性がわれわれに費用負担の削減を要求するでしょう。すなわちわれわれはより早く借金がなくなり、新しい戦争をする状態になります。そしてわれわれが戦争をすることが可能になるような歩兵の大軍を維持することではなく、彼らの給与を支払う能力を持たせることになります。われわれには八年戦争¹¹⁴においてこの経験があります。というのはわれわれはフランスと一つの戦いでも勝利を収めたことはなかったし、それに私が見てきたように太った田舎ものの間抜けが機敏なレスラーを打ち負かすことがあるように、単に自然の力によってそれを撃退したのです。そして同じ方法で、(われわれの政策、経済、経営ではなく)われわれは今後彼らに対処しなければなりません。そしてそれがわれわれの敵が新しい争いをおそれるような状況になるように、他の方法では到底なしえないものですが、われわれの出費を抑え、できるだけ早く公の負債を精算することによって。われわれが年間四百万ポンドも資金という名目で支払わなければならないと考えることは惨めなことです。彼らが大蔵省を黙らせない限り、その一部でも公共事業に回されることはありません。それを認めることはあまり賢明なことではありません。したがって私は管理者の方々にお尋ねしたい。新しい戦争が起こったとすれば、どのような方法でその戦争を維持することを考えておられるのでしょうか。というのはわれわれは全員いまでは自分たちの限度を知っており、もし議会がそれに同意したとしてもわれわれには地租、人頭税、そしていくつかの物品税だけしか残っていません。そして今回だけ提案させていただきますが、それらをまとめて、一年以内に集まるものとして、三百五十万ポンドになりますが、それは実現不可能に思われます。そしてわれわれはそれらを補充することになりますが彼らが新しい戦争の場合に利率やプレミアムを十四、もしくは十五パーセントより増やさないという計算では残りは三百万ポンドになります。あえていわせてもらいますが、彼らは王室費をあまり減額させたくはないと思っていますし、自分たちの給料と年金を減らされたくはないでしょう。そうすれば、もし国民が可能な限り最大限の資金を支払うとして戦争費用としてその金額から一年当たり七十万

ポンドを差し引けば、二百三十万ポンドになります。したがって問題は先の戦争とは違って、どのようにしてわれわれが全体的にフランスに対抗して戦争を続けるかということではなく、どのようにして最も有利になるように二百三十万ポンドを処理するかということです。その件についてすべての人々が考えておられると思いますが、よい艦隊に割り

(44)

当てるべきです。

このことにより私はスペイン王が死去したり、フランスと新たな衝突が勃発したような場合の新しい戦争を運営する唯一の方法というわけではないとしても何が最善かということを考えるようになりました。そして私は国家は戦争の前と同様にあらゆる妨害から完全に自由であるべきだと考えます。多くの人々は現在、フランダースに線香花火的な攻撃を加えたり、フランスとイナイナイバアをわが国民にさせるために莫大な資金を送りつづけて、せいぜい彼らの脳を石の壁に打ちつけることはわれわれのすべきことではないという点で私とおなじ考えだと思います。もしそこで戦争が必要なら、オランダ人とドイツ人にそれを実行させることがわが国の利益になります。それが彼らの状況に適しています。そしてオランダには海を引き受けさせる。それでももしわれわれが彼らとそのような取引をするには十分な機知と誠実さが無く、われわれが彼の地で軍隊を維持する必要性が再び生じるなら、われわれはこの地で召集する費用の半額でドイツで雇うことが出来るでしょう。そして彼らをここから派遣するよりは早く準備が整うでしょう。またその国は人口が多く、すべての兵士は疲労に強く、われわれが自国の軍人に支払う金額より少なくても軍務に服します。そのほかにわれわれは他人の流す血で戦争を進め、そしてすべての政府の力と富である自国民の生命を温存することになります。戦争が終結したときに士官に支払う費用を節約することになるでしょうし、そして彼らを解散させるために多くの困難を生じさせることもないでしょう。

フランスと戦争する新しい方法を考え出した人がいます。そしてフランスがスペインを所有することを防ぐためにスペインへ軍隊を派遣する必要があると告げています。そのためわれわれはその軍役の準備としてわが国で軍隊を維持しなければなりません。ついであるが騎兵は解散させると言っています。彼らは騎兵をスペインへ派遣するつもりはないからのようです。しかしこの考えに十分に対応するために私はカレス、または地中海にフランス艦隊よりも強力な艦隊を維持すべきだというのはすべての人々の意見であると思います。そうすればわが国から兵士を派遣するよりは皇帝の軍隊をフィナル¹¹⁵を経由してスペインへ派遣することはより簡単でありより安くすみます。そして彼らは同じ宗教で

あり、オーストリアの臣下なのですからより好意的に受け入れられるでしょう。それに対してわが軍がフランスからと同様にあの頑固な国から大いなる危険にさらされることが危惧

(45)

されます。その他には、ポルトガル国王が自国防衛のために武装しています。そして相当額の資金がそこに注がれるでしょう。それはここから同じ費用をかけて派遣するよりも現地で二倍の軍隊を召集することが可能になります。

しかし今回だけはわれわれがフランダースとスペインへ軍隊を派遣する必要があることを認めます。しかしそのときがくるまでイングランドに常備軍を維持しておかなければならないという結論にはなりません。チャールズ二世がフランスと戦うために四十日以内に二万人から三万人の軍隊を召集したことを記憶されているでしょう。そして彼の治世の初年にこの国王が召集した連隊はきわめて短期間に仕上げられました。私自身としては、もしも管理運営者がいぜんとして昔のようなままであれば輸送する船舶や食糧が準備できる前に新しい軍隊を召集する必要があるかもしれないと考えています。そしてスペイン国王が夏には死亡しないような事態もありえるでしょう。そうすればわれわれは冬を迎えることとなります。われわれはこれに加えて、フランス国王が非常に多くの軍隊を解散して、いまはフランスの非常に多くの場所で防御が手薄になっています。そしてドイツ人やオランダ人はきちんと給与を支払って莫大な軍隊を維持しています。そしておそらくトルコとも休戦することになるでしょう。ポルトガルとイタリアの君主は自国の防衛のために連合しなければなりません。そしてフランスがスペインに対して進出を試みれば彼らはすぐに攻撃するでしょうし、このように強力な君主連合に対抗するためにフランスは先の戦争よりもずっと少ない国同士で軍隊を召集する必要性に陥るでしょう。

そして結局はこの軍隊を維持することによってわれわれはどのように強力な利点があるでしょうか。まさに、実際にもう少々軍隊を増やし（というのは士官は常に準備ができており、新しい戦争が起これば大部分の兵士が召集されることになっています。）フランスを攻撃するために六週間早く準備を整えれば。そして私はあえてこれらの紳士方自身に問いたしたい。これほどまでにきわどいフランスとのバランスがわれわれの自由に対する危険度や、わが国の政体を破壊し、スペイン王が死亡したときにそなえて軍隊を維持するための一定の出費に相当するのだろうか。

もしこれらの紳士諸君が実際に新しい戦争をおそれていて、われわれから自由を奪うために脅そうとするための根拠のない恐怖のもととしてではなく、自分たちの党派の目的を獲得するためにそれを使っているのであれば、心から国民をそのように導く方法は、自

(46)

分たちのすべての行動は国民のためになるものであることを示すことです。国家の出費を減少させ、最大限の儉約で収入を管理するためであり、給料の一部を延滞し、自国が貧乏になるときに金持ちになることのないように、国王によって約束されたように公共事業に国民の血と汗によって獲得されたアイルランドの土地を利用するために心からの助力を与えるためであり、そして人々を罰するさいに不適切な言葉をなげかけないことです。そして同じ間違いにたいして他の人々を処刑したり、大多数の国民の恐怖にたいしてどのようにして常備軍を維持しつづけるかという陰謀に三ヶ月も費やさないことです。というのは、彼らにどのような空想をさせたとしても、国民は戦争が終わったときには軍隊を排除できると得心するまでは新しい軍隊の召集には決して同意しないでしょう。また、軍隊を自発的に解散する以外にはそれを国民に確信させる方法はありません。これが実行される事態を見れば、われわれは彼らが真剣だと言うことが信じられるし、国民は一致して新しい戦争に加わるでしょう。そうでなければつねに国家のかなりな部分が（陛下にどのような個人的な名誉を持っていようと、またはフランスを恐れている）その全重量が車輪に寄りかかることになります。そして軍隊は自分たちの役に立つというよりもより多くの害をなすでしょう。

結論として言えば、われわれは賢明で有徳の君主を戴いています。彼は常に国民が選んだ人々を会議に参加させることによって国民を満足させようと努力してこられました。そして国民の利益が拒絶されると、国王は彼らを追い出して国家を満足させました。それゆえに私はかつてはホイッグと呼ばれた人々に時宜をえた忠告をさせてもらいます。自分たちの利益を国王陛下と守る方法は国民とそれを維持することです。彼らの昔の友人は彼らが自国を放棄するまで彼らを見捨てることはないでしょう。彼らが自国を見捨てれば、彼ら自身の功德によって判断されることになります。そして私はあまり予言を信じることはありませんが、あえて一度だけ予言者として述べさせてもらいます。そして彼らはリハーサルで国王の医者や国王の先導役の運命に遭遇することになるでしょう。新しい主人は彼らを追い出し、誰も彼らを受け入れてはくれないでしょう。

終わり。

あとがき

本稿は以下のパンフレットの翻訳です。全体は 50 頁を越えるものなので今回は前号の続きとして、残りの後半部分です。

A Short History of Standing Armies in England, London, 1698. このパンフレットは例によって著者名は示されていませんが、1697年10月に出版された *An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a Free Government, and absolutely destructive to the Consitution of the English Monarchy*, London と同様に John Trenchard (1662-1723) の著とされています。

注（前号の前半部分からの続きの通し番号としています。）

- 65 Frederick Schomberg, 1st Duke of Schomberg, KG, (1615年12月 - 1690年7月11日)、初代ションバーグ公フレデリック・ションバーグは、イングランドの軍人。各国を渡り歩き主にフランスで活躍、後にイングランドへ渡りイングランド貴族に叙された。ドイツ語ではフリードリヒ・ヘルマン・フォン・シェーンベルク (Friedrich Hermann von Schönberg)、フランス語ではフレデリック＝アルマン・ド・ションベール (Frédéric-Armand de Schomberg) と呼ばれる。フランス軍元帥およびイングランド軍とポルトガル軍の将軍。1689年ウィリアム三世の命令でアイルランド北東のキャリクファークス湾に上陸、ベルファストから南下しロンドンデリー救援に向かったが、冬になるとウィリアム軍は貧弱な補給と寒冷な気候に悩まされ、多くが病に斃れベルファストへ撤退した。この事態に有効な手だてをうたなかったションバーグは、現代イギリスにおいて無能な指揮官との烙印を押されている。『ウィキペディア』。
- 66 Siege of Londonderry 名誉革命の際、1689年、プロテスタント系住民がイギリスを追われたジェームズ二世軍の包囲攻撃に105日間耐え、劇的な勝利を収めたことで名高い。日立デジタル平凡社、『世界大百科事典』。(以下『世界大百科事典』という。)
- 67 Dundalk アイルランド北東部のラウズ県の県都。
- 68 General Mackarty もしくは McCarthy, Justin。ジェームズ二世側の将軍で、1689年アイルランド Enniskillen 近郊の Newtownbutler での戦いで Enniskillen の市民を主力とするウィリアム三世側の軍に敗退した。Wikipedia。
- 69 Inniskilling men もしくは Enniskillen。およそ2000名の武装市民が Enniskillen を本拠地としてジェームズ二世軍に対してゲリラ戦を展開した。Wikipedia。
- 70 Kirk または Kirke, Lieutenant General Percy (c. 1646 - 1691)、イングランドの将軍、チャールズ一世およびチャールズ二世の廷臣であった George Kirke の息子。Wikipedia。

- 71 Commissary Shales ジェイムズ二世の軍食糧徴発官であったことが議会で問題視された。 *Parliamentary History of England, from the earliest period to the year 1803*, London, 1809, Vol. V, p. 454.
- 72 King Jemmy ジェイムズ二世。
- 73 Boufflers Louis-François ～, Duc de ～ (1644-1711)、フランスの軍人；ルイ十四世の治世に、対オランダ戦争 (1672-78)、スペイン継承戦争 (1701-11) で功をあげた。研究社、『リーダーズ + プラス』(以下『リーダーズ + プラス』という。)
- 74 Earl of Portland Hans William Bentinck, 1st Earl of Portland (20 July 1649?- 23 November 1709)。オランダおよびイングランドの貴族、オランダ時代からウィリアム三世の寵臣であった。 *Wikipedia*。
- 75 Dutch Regiment オランダ連隊。英国王がオランダに派遣して、兵士の給与はオランダ側が支払っていた。
- 76 Tangeriners タンジール守備隊。
- 77 Pensioner Parliament 恩給議会。チャールズ二世時代の英国長期議会 (1661-79)。
- 78 チャールズ二世は 1685 年に死去しているので、1680 年のことだと思われる。
- 79 Agesilaus アゲシラオス (2 世) (444? -?360 B.C.)、Sparta 衰退期の王 (c. 400-360 B.C.)。
- 80 Huniades もしくは John Hunyadi (c. 1407-11 August 1456) ハンガリーの軍人、政治家。 *Wikipedia*。
- 81 Scanderbeg もしくは George Kastrioti Skanderbeg (6 May 1405 - 17 January 1468)、アルバニアの君主。 *Wikipedia*。
- 82 forty years war 1568 年から 1648 年にかけて (1609 年から 1621 年までの 12 年間の休戦を挟む) 戦われた 80 年戦争と呼ばれるオランダ独立戦争の一部期間を指すと思われる。 *Wikipedia*。
- 83 Giron もしくは Girón, フランス東部、Rhône-Alpes にあるドイツ国境に近い町。 *Wikipedia*。
- 84 Roses スペイン南東部フランス国境に近いカタロニアにある町。 *Wikipedia*。
- 85 Catalonia スペイン南部地中海側の地域。バルセロナがある。 *Wikipedia*。
- 86 County of Chiny ベルギー南部、フランス国境に近いルクセンブルク地方にある。 *Wikipedia*。
- 87 Mons ベルギー南部、エノー州の州都。ブリュッセル南西方約 60km に位置。17 世紀以後数度にわたってフランスに占領された。『世界大百科事典』。
- 88 Charleroy もしくは Charleroi ベルギー南部エノー州の工業都市。1667 年にスペイン

ンのネーデルラント総督カステル・ロドリゴ侯がここに要塞を築いて、国王カルロス（シャルル）2世にちなんでシャルルロアと命名したのに始まる。『世界大百科事典』。

- 89 Courtray もしくは Courtrai ベルギー西部、Lys 川に臨む都市；中世の重要な商業都市。研究社、『新英和辞典』第六版。
- 90 Dinant ベルギー中南部ナミュール州の都市。リエージュ司教領とナミュール伯領との境界にある軍事的要衝として、多くの政治的紛争に介入して、数度にわたる破壊を経験した。『世界大百科事典』。
- 91 Bishop of Leige もしくは Liège ベルギー東部の工業都市で、同名州の州都。980 年以来 1795 年まで、ドイツ帝国に属する領邦リエージュ司教領の首都であった。『世界大百科事典』。
- 92 Pignerol もしくは Pinerolo はイタリア北西部の町。 *Wikipedia*。
- 93 Cazal もしくは Casale Monferrato カサーレ モンフェラート、イタリア北部 Piedmont 州の市。
- 94 Susa イタリア北西部 Turin の西にある村。
- 95 Montmelian フランス東部 Savoie 県の要塞都市。
- 96 Nice フランス南部、アルプ・マリティム県の県都。長くサボア領で、1860 年最終的にフランス領となった。『世界大百科事典』。
- 97 Villa Franca もしくは Villafranca di Verona, ミラノの東部に位置している。
- 98 Piemont もしくは Piemonte イタリア北西部の州。『世界大百科事典』。
- 99 Treves もしくは Trier ドイツ西部 Rhineland-Palatinate 州の都市、ルクセンブルクとの国境近く、Moselle 川に臨む古い都市；18 世紀まで強大な権力をもった大司教が治めた。『リーダーズ+プラス』。
- 100 Germansheim もしくは Germersheim ドイツのラインラント＝プファルツ州の都市。 *Wikipedia*。
- 101 Palatinat ドイツのラインラント＝プファルツ州の南部地方のこと。『ウィキペディア』。
- 102 County of Spanheim もしくは Sponheim ラインラント＝プファルツ州バート・クロイツナハにある都市。 *Wikipedia*。
- 103 Verdentz ドイツのラインラント＝プファルツ州、フランスとの国境に近い町。 *Wikipedia*。
- 104 Dutchy of Deuxponts もしくは Zweibrücken。ツヴァイブリュッケンのフランス語読み。ドイツのラインラント＝プファルツ州のツヴァインブリュッケン公領。

Wikipedia。

- 105 County of Mombelliand もしくは Montbéliard。フランス東部の町、旧 Burgundy 公国の首都。『リーダーズ + プラス』。
- 106 Burgundy フランス東部の Saône 川西岸の地方；昔は王国・公国で、最盛期には Low Countries, Franche-Comté などを含み、13 世紀以降 Arles 王国と呼ばれた。
Wikipedia。
- 107 Friburg 北東フランス Lorrain 地方にあり、ドイツと国境に近い町。*Wikipedia*。
- 108 Philipsburg もしくは Philippsburg, ドイツ Baden-Württemberg の Karlsruhe にある市。ドイツとフランスの間の係争地となっていた。*Wikipedia*。
- 109 Alsace フランス北東部、Vosges 山脈と Rhine 川の間のドイツに接する地方。『ランダムハウス英語辞典』。
- 110 Eberenburg フランス北東部、Vosges 山脈と Rhine 川の間のドイツに接する地方。
Wikipedia。
- 111 Dutchy of Lorrain もしくは Lorraine フランス東部にあり、ドイツと国境を接している。*Wikipedia*。
- 112 Hunningen もしくは Huningue 北東フランス、ドイツ国境近く Alsace にある町。スイスバーゼルの北に位置している。*Wikipedia*。
- 113 The King of Spain カルロス二世 (1661 - 1700)、スペイン王 (在位 1665 - 1700)。スペイン・ハプスブルク朝最後の王で、4 歳で即位したが子供に恵まれなかったことから、スペイン王位継承問題はヨーロッパ全体の一大関心事となった。彼の死後、ヨーロッパを二分するスペイン継承戦争が勃発した。その結果、スペインはヨーロッパに所有していた本国以外の領土のほとんどすべてを失った。『世界大百科事典』。
- 114 eight years War イングランドとスコットランドとの戦争。The Rough Wooing War (December 1543 – March 1550) ともいう。ヘンリー八世が息子エドワードと生後一歳ばかりの幼児であったスコットランド女王メアリ (1542-87) との結婚を強要しようとしたことに由来する。*Wikipedia*。
- 115 Final もしくは Finale Ligure。イタリア北西部、ジェノバ湾岸にある町。
Wikipedia。